

【登場人物表】

押田萌（28）ケンコーフィットネス社員

堺涼（36）ケンコーフィットネス社員

上島司（47）萌の上司

堺翔（4）涼の息子

押田美紀（56）萌の母

別所明日香（35）涼の前妻

赤羽優斗（21）アイドル

十条裕也（18）アイドル

保育士

○ケンコーフィットネス・オフィス（夕方）

壁にサプリメントのポスター。  
入口にプロテインのサーバーが置かれて  
いる。

パソコンに向き合いつつそわそわしながら  
時計を見る押田萌（28）。

19時半を指している

電話がかかって来て嫌そうな顔を浮か  
べつつ渋々取る。

保育士「もしもし私、若葉保育園のものが  
が：」

萌「（ため息）堺ですね、今代わります」  
保留ボタンを押し堺涼（36）を睨みつ  
ける。

萌「堺さん、また！」

涼、慌てて受話器を取る

涼「はい、：：また熱を。すぐ迎えに行き  
ます」

手早く片付け上島司（47）のもとへ  
涼「すいませんが息子が：」

司「わかったから早く行けっ」

頭を下げ走って出ていく涼。

司「押田！」

萌「またですか？」

司「あいつの残しくらい余裕だろ？」

萌「予定があるかえら定時で帰るために頑張

ってるんです！」

司「俺も若い頃はデートのために頑張ったも

んさ」

萌「デートじゃないです！」

司「人間助け合い、いつかこの苦勞も何かの

役に立つと思っ」

萌「いいですよ、子持ちは早く帰れ」

司「お前はそのままできてくれよ。早退ば

つかじゃ手が回らん」

タイプする音が荒々しく大きい。

萌「こんなとこ絶対やめてやる……」

時間を見てさらにペースを上げる萌。

ライブハウス（夜）

息を切らし扉を開けると各メンバーの  
写真と名前の描かれたプレートを持っ  
た列が五つ形成されている。  
赤羽優斗（21）のプレートを受け取り  
最後尾へ並びプレートを受け取る。  
楽し気に話す優斗を幸せそうに眺める  
萌。  
列が進み優斗の前へ踏み出す萌。  
一緒に写真を撮り、写真にサインを描  
く優斗。

優斗「遅刻」

萌「ごめん、仕事で」

優斗「俺に会いたくて頑張ったんだ？ 偉い」

萌「そりゃ一分一秒共有したいし」

優斗「頑張る萌もいいけど無理すんなよ？

俺はいつだって萌の傍にいるからさ」

アラームの音と共にサイン入りの写真  
を手渡す優斗

萌「今日もありがとう、私のために生きてて  
くれて」

優斗「それはお互いに、だろ」

ウインクされ列から離れてうずくまる

萌。

萌「ひひっ、もう死んでもいい。生きるけ

ど、優斗のために」

○萌の部屋（夜）

ベッドで寝転がる転職サイトを開きスクロールしていく。

募集内容に『定時退社』、『家庭と両立しやすい』

萌「結婚してたら偉いのかよ。結婚なあ」

チェキファイルを手に優斗との写真を眺める。

萌「結婚しよ、なんて言ってくんないかな？」

押田美紀（56）から電話。

着信履歴がいくつも溜まっている。

美紀の声「さっさと返しなさいよ」

萌「どうせ大した用ないじゃん」

美紀の声「心配なのよ若い子たちに貢いでま

ともに食べてないんじゃないかって」

萌「娘をそんな哀れな人種のオタクみたいに

言わないで」

美紀の声「私だって言いたくないけどその通

りじゃない」

空のカップ麺の容器がベッドわきに転

がっている。

美紀の声「そんなだからまともなお付き合い

もその歳で出来ないのよ」

萌「恋愛だけが人生じゃないし」

美紀の声「私がいなくなったらどうする？

父ちゃんだってもういないんだし一人ぼ

っちよ？ 推してる男の子だっていつま

でもいてくれるわけじゃないんだし」

萌「短命だからこそ私が毎回全力で応援して

あげないといけないんじゃないんじゃん！」

美紀の声「母ちゃんさ、あなたの好きなこと

自体は否定しないけどそれをなくしたと

きどうすんの？」

萌「卒業なんてよくあるし、なっても新しい

推し見つけるだけだし」

美紀の声「それじゃいつまで経っても……」

萌「もう寝るから、おやすみ」

通話を切る。

萌「ま、他なんて興味ないけど。私はずっ

と優斗一筋！」

タイトル「一途じゃなきやダメですか？」

○ケンコーフィットネス・オフィス

12時過ぎ。

机に突っ伏して寝ている萌のもとに涼  
がやってきてお菓子を置くと萌が目を  
覚ます。

涼「ごめん、起こしちゃって」

萌「いえ、何か？」

涼「いつも迷惑かけてるからお詫びに。お  
菓子なんかで申し訳ないけど」

萌「お子さん、大丈夫でした？」

涼「今日はうちで寝てる。サプリ飲ませた

り食べ物とかも気をつけてるんだけど：  
「

萌「へー、大変ですね」

司の声「堺、押田。いいか？」

嫌そうな顔を浮かべ渋々涼と上司のも  
とへ。

司「新店の企画、お前たちに任せようと思っ  
てるんだが」

涼「僕、子供のことでまた抜けないといけな  
いことあると思うんで迷惑になるかと：：」

萌「私だって定時で帰りたんですけど！」

司「そんな忙しい二人の要望を叶える素晴ら  
しい方法がある、リモートワークだ！ 出

勤は週末だけ！ これなら子供のことや  
退社時間も気にしなくていい。どうだ？」

涼「どうだって言われましても：：」

萌「もっとやる気ある人に頼んだらいいじゃ  
ないですか」

司「帰りたいのはお前らだけじゃないんだよ  
！ 俺だってたまには定時退社してやりたい



さ。　　そんなみんな羨むような待遇で感謝以外の言葉でないはずだが？」

　　不満そうな萌。

涼「……わかりました」

司「流石、物分かりがよくて助かる」

萌「なんで私まで巻き込まれてるんですか？」

司「いいことじゃねえか残業から解放されて」

萌「いいいわけ……」

○萌の部屋（朝）

スマホのアラームが鳴り、手に取ると

6時半を表示していて慌てて起き着替

えようとする萌。

萌「ってそうだ今日からリモートだ。　　いい

なりリモート！　　ならもう少し」

ベッドに戻るとパソコンに涼から着信。

萌「ちよっと始業時間とかお構いなしかよ」

慌てて髪を手櫛で直しただけ着替え着

信を受ける。

萌「まだ6時半ですよ？　　どうしたって……」

画面にはパジャマ姿の堺翔（4）。  
額に熱さまシートを貼っている。

翔「お姉ちゃん誰？」

萌「えと、もしかして翔君？」

翔「僕のこと知ってるの？」

萌「堺さん、お父さんからよく聞かされてるから」

翔「お腹空いた」

萌「ご飯食べてないの？」

涼の声「翔、出来たから手洗っておいで」

萌「出来たって」

翔「お姉ちゃんのご飯食べた？」

萌「まだだけど」

翔「パパのご飯美味しいんだ。お姉ちゃんも一緒に食べよ！」

萌「お姉ちゃん近くにいないから難しいかな」

翔「一緒にいい！食べようよ！」

涼が翔を迎えに来る。

涼「翔何して、ってパソコンは触っちゃ駄目  
っていつも言ってるだろ！」

翔「手洗ってくる！」

走り去っていく翔。

涼「ごめんねこんな朝っぱらに。また後で」

通話が切れる。

布団に戻り目を閉じるも眠れず、大きく欠伸をしてシリアルを食べる。

萌「子供って疲れそう」

○ファミレス（夜）

オムライスと一緒に優斗の写チエキを撮影し、ツイートする萌。

萌「今日も生きててくれてありがとう！」

翔の声「オムライスとクリームソーダ！」

涼の声「そっちじゃ多いからお子様セットに  
しなさい。オムライスついてるし」

後ろを恐る恐る振り返る萌。

堺親子を確認し、写真を財布に仕舞う。

萌「現場後の至福の一時が〜！」

翔「ヤダ、おっきいオムライスがいい！」

涼「おっきいのは今度パパがつくるよ」

急いでかきこむ萌。

翔「オムライス！」

涼「ならお子様セット食べきれたら好きなデザート頼んでいいぞ？」

翔「デザート？」

涼「プリン二個でもアイス頼んで乗っけてもいい。さあオムライスとどっちがいい？」

翔「デザート！」

涼「決まりだな」

翔「デザート、デザート！」

食べ終え、速足で大回りしてレジへ向かう萌。

支払う際に財布からチエキが落ちる。

口いっぱいにオムライスを頬張る翔。

涼「旨いか？」

翔「うん！」

会計を済ませ店を出るとガラス越しに堺親子が楽し気に食べているのを目撃

し踵を返す。

萌「なんでこんな惨めな思いしてんだろ」

○ 萌の部屋

画面に映る涼。

後ろからだたばたと走り回る音が聞こえている。

涼「それじゃ、そういう方向で」

翔の声「パパー！」

涼「まだ治りきってないんだから寝てろって」

萌「大変そうですね」

涼「毎回煩くてごめんね」

萌「嫌にならないんですか？」

涼「そんなこと思う暇ないくらい必死だからね。それに楽しいもんだよ、大事なものがあるとてのは」

通話が終わり、寝転がって転職サイトを眺める萌。

『完全リモート』の文字に手を止める。

萌「やっぱいいよな、リモート。次いつ戻るかかわかんないしそれまでには……」

スマホの時間が11時55分でアラーム

ムが鳴る。

慌ててチケットサイトを開き59分に  
チケット購入ボタンに指をかけ構える。  
12時になったと同時にボタンを押し  
購入完了。

萌「久々の一桁！ リモートやっばいい！」

部屋の静けさにイヤホンを手に取る。

萌「煩かった、なんであんな楽しそうなんだ  
ろう？」

○ケンコーフィットネス・オフィス（朝）

気怠そうに会社する萌。

司「リモートはどうだ？ 嫌ならまた戻……」

萌「快適すぎて週一の出社も拒否したいです」

司「そうか、だが残念すぐそんな生活も終わ  
る」

萌「は？ 早すぎませんか？」

司「あくまで堺に仕事振るためのものものだ  
からな。あいつがいなくなるなら必要な  
い」

萌 「え、辞めるんですか？」

退職願を見せつける司。

司 「子供優先出来る仕事探すんだとよ。天

職も厳しいって時代に思い切るよな」

眠 そうに当社する涼。

涼 「おはようござい……」

詰め寄る萌。

萌 「来てください！」

涼 「へ？」

萌 「いいから！」

萌の後に続く困り顔の涼。

○同・給湯室（朝）

コ―ヒ―を片手に睨みつける萌。

涼 「これ以上会社のほうに迷惑かけるわけに

いかないし……」

萌 「まだ次決まったわけじゃないんですよ

ね？ 今辞められたら私が迷惑するんで

す！ 私だって辞めたいんですから」

涼 「え、そうだったの？」

萌「もう少し私の転職決まるまで残ってもらえませんか？なるべく協力するんで！」

涼「それはありがたいけど、負担じゃない？」

萌「私の快適なりモート生活のために何卒！」

涼「そう言ってくれるなら」

萌「よかった」

包装された袋を渡す。

涼「このくらいしかお礼出来ないから。いい

つも助けてくれてありがとう」

萌の鼓動が大きく早くなり顔が赤くなる。

萌「仕事ですんで、仕方ないですけど！」

涼「そうだね、ごめん」

先に給湯室を出る萌。

包装を解きながら中のお菓子を見て嬉しそうに微笑む。

萌「何喜んでんだ私！ん？」

中のぽち袋に気づき、中を覗くと落としたチエキが入っている。

萌「堺さん！なんで!？」



○ 萌の部屋（夜）

写真を握り締めベッドで突っ伏す萌。

萌 「オタバレ、死んだ……」

パソコンに涼から着信に思わず身を強張らせる。

萌 「どんな顔すりゃいいんだ……」

視線を部屋に巡らせパックを見つける。

翔 「わっ、お化け！」

パックをした萌。

萌 「お化けじゃないから！ てかまた怒られ

るよ？」

翔 「怒られないよ、パパ寝てるし」

萌 「え、もう？」

翔 「夜ご飯作ると寝ちゃうの」

萌 「そう、なんだ」

翔 「お姉ちゃん落とし物した？」

萌 「げ、何で知ってんの？」

翔 「僕が見つけたの。お姉ちゃんの写真だったからパパに渡してもらった」

萌 「子供にまで見られた……」  
翔 「お姉ちゃんの好きな人？」  
萌 「へえ？　そそ、そんな……」  
翔 「凄い楽しそうだった！　僕もパパと一緒に  
だと笑っちゃう」  
萌 「そ、そうなんだ」  
翔 「お姉ちゃんはパパ好き？」  
萌 「ちよ、何てこと言うの！」  
翔 「嫌い？」  
萌 「嫌い、じゃないけど」  
翔 「じゃ、好きだね」  
萌 「そこまで言っていない！　誤解を生む言い  
方しないです！　お母さんに怒られる」  
翔 「お母さん怖いのです」  
萌 「私じゃなくて、翔君の」  
翔 「お母さん怖くないよ。　たまに遊んでく  
れるしお泊りさせてくれるし」  
萌 「お泊り？　一緒に住んでないの？」  
翔 「うん、パパと名前違うの」  
拳を握り締める萌。

萌「ってことは、独り身！」

涼の声「翔、そろそろ寝なさい」

涼の顔が一瞬映り込んだ瞬間、通話を切る翔。

萌「って何喜んでんだ！（握った拳を下し）

だいたい子持ちとかハードル高すぎるし。

そもそも好きとかあるわけ……」

優斗とのチエキを眺める萌。

萌「これって、浮気？」

○ライブハウス（夜）

優斗が顔を近づけ覗き込んで来て思わずのけぞる萌。

萌「ちょ、近いつて！」

優斗「疲れてる？」

萌「そんなこと、優斗に会えて寧ろ元気マシマシだし！」

優斗「ならいいけど、なんかあったらいつで

も俺がいるからな」

萌「わかってるよ」

アラームの音でチエキを受け取る萌。  
優斗「来週の生誕、絶対来いよ」

萌「生誕、え、生誕!？」

優斗の元から離れる萌。

萌「もう生誕の時期か、忙しくて忘れてた。  
プレゼントどうしよう？」

○家電量販店

フィットネスエリアでマッサージガン  
を試す萌。

萌「ああ私も欲しいなこれ」

箱を二つ手に取る萌。

萌「私も買えばお揃じゃん！」

涼の声「押田さん？」

振り返ると涼が立っている。

萌「ヴァツ、なんでこんなところに？」

涼「息子の誕生日プレゼント選びにね。来

週の土曜だね」

萌「優斗と一緒に！」

涼「彼氏さんも来週誕生日？」

萌「いや、彼氏なんてそんな……」

涼「ごめん、そういうの立ち入らない方がいい  
いもんだよね」

萌「プレゼント、一緒に選ばないんですか？」

涼「今日は母親のところに行ってるよ。たまの  
一人だからリクエストされたのだけ買っ  
て少しのんびりしようかと」

萌「堺さん本当にシングルファザーなんです  
ね」

涼「あれ、話したことあったっけ？　よくい  
る妻に逃げられたダメ夫だよ」

萌「あれだけしっかりお父さんしてるのにダ  
メ夫なんてありえないです！」

涼「そんな熱くフォロ―してくれるなんて思  
わなかったな」

萌「翔君も、堺さんのこと好きって言うてま  
したし」

涼「あいつまた勝手にパソコンを！」

萌「私は大丈夫なんで。それなりに楽しい  
んで」

涼「公私に渡って迷惑かけっぱなしで申し訳  
ないよ。予定なかったらこの後お礼に食  
事でも……」

萌「デートですか!？」

涼「デート?」

萌「あ、何でもないです！　すぐ行きましょ  
う！」

涼「すぐはちよつと、まだプレゼント買って  
ないし」

萌「付き合います！　早く行きましょ！」  
涼の背中を押す萌。

○同・おもちゃ売り場

率先して変身ベルトを見つけ出し掲げ  
る萌。

萌「確保！」

プラモコーナーをじっと眺めていた涼  
が振り向く。

萌「堺さん？」

涼「あ、見つけてくれてありがとう」

萌「楽しみにしてるのに手に入らなかったら  
悲しいじゃないですか」

涼「そういう気持ち忘れてたかも。誕生日  
萌から変身ベルトを受け取る涼。  
なんてあげるだけだし」

萌「誕生日いつなんですか？」

涼「：：あ、先月だ」

萌「なんで教えてくれないんですか？ おめ  
でとうございます！」

涼「聞かれたことなかったし、でも祝ってく  
れてありがとう」

萌「欲しいものなんですか？」

涼「いや悪いし」

萌「何でも言ってく下さい！ 私がプレゼン  
トするんで！」

涼「いいって！ ただの同僚なんだし」

萌「ただの：：」

涼のスマホに元嫁からLINE。

『翔が熱出した』

涼「あいつまた。ごめん、お礼は別の機会

に」

会計を済ませた涼が会釈して駆け足気味に去っていく。

プラモコーナーを眺め手に取る萌。

萌「これか？」

○萌の部屋（夜）

床に置かれた小さな包装が二つ入った袋と大きな包装された箱をベッドで寝転がりながら眺めている萌。

萌「推しと好きって全然違うんだな」

転職サイトからメールが来る。

萌「うっし、書類通った！でも、私が辞めたら堺さん転職出来ないのか。そもそも辞めたら会えなくなるのか。でも優斗に会う時間は欲しいし、ん〜」

ベッドの上を悶えるように転がり、落ちる萌。

萌「私が会いに行けばいいのか、ってアイドルじゃないし。……会いに来てくれるよ



うにならないかな？」

画面の消えたパソコンに映る自分と目が合う。

萌「独り言、ヤダな」

Twitterをスクロールしていくと『大切なお報せ』の文字に手を止める。

萌「活動休止!?　なんで？」

○ケン　　コーフィットネス・オフィス

放心状態でパソコンを叩く萌。

司「押田」

「か所のボックスに延々入力し続け文字がはみ出している。」

司「お・し・だ！」

萌、足取り重く歩いていく。

司「具合悪いのか？」

萌「心が……」

司「はは、若いうちは失恋なんて何度もあるもんだぞ」

萌「失、恋……」

司「で、進捗はどうだ？」

萌「サプリメント類特化店なので、プロテイン等フレイバーの種類のものは試飲の機会を設け、大袋の商品の一食分での販売を行うという案で考えているのですが。栄養価、味共に高水準であることをスポーツをする人や健康を意識する人以外も足を運びやすい店づくりを目指そうかと」

司「新規層に寄り添うのか、なるほど。一食分は確かにいいかもな」

萌「ありがとうございます：：」

司「あともう一つ、何か売りが欲しい」

萌「もう、一つ：：」

司「また堺と話し合っといてくれよ。意見はなるべく通してやるからさ」

堺のデスクに視線を向ける萌。

パソコンのメール画面を開く。

『翔まだ熱あるんで今日はお休みさせていただきます』と書かれた涼からのメール。

『今晚お話出来ますか？』と打つも躊躇い削除する。

○ 萌の部屋

一人企画書を描く萌。

するとパソコンに着信。

翔が映り溜息をつく萌。

萌 「熱あるんじゃないの？」

翔 「ちよつと下がった」

萌 「寝てなきやダメじゃない？」

翔 「つまないもん、お話しよう」

萌 「今日はお姉ちゃん仕事しないと……」

翔 「僕ね、休んでばかりだから幼稚園に友

達いないんだ」

萌 「お話してくれる人はいるでしょ？ その

人と仲良くなればいいじゃん」

翔 「みんなのお話ないときのことだからわ

かんないんだもん」

萌 「なら好きなものの話とかは？好きなも

のが同じ人とは仲良くなれるんじゃないな

い？」

翔「好きな話して楽しくなると熱出ちゃうから」

萌「なかなか積んでるな」

翔「積み木？」

萌「一人つてさ、つまんないよね」

翔「熱があるときはパパがいてくれるから一人じゃないよ」

萌「ぐ、マウント取られた」

翔「でもパパは友達じゃないから」

萌「私は友達？」

翔「うん！お姉ちゃんとお話しするの楽しい」

萌「お父さんより？」

翔「どっちも！」

萌「はは、欲張りだな」

翔「だって好きが違うもん」

萌「どういう風に？」

翔「んーわかんない」

萌「好きって難しいね」

翔「ねー」

涼の声「翔！」

萌「パパ呼んでるよ？」

翔「またね！」

通話が切れる。

萌「好きが違う、だよな」

包装された大小の箱を眺め、大きい方を手に取る。

萌「私は、どっちだろ？」

○シヨツピングモール・店舗

空の陳列棚が置かれている。

涼が「POP」で商品の配列図を眺めチエックしている

萌「わざわざ見に来なくても現場の人間に指示通りやってもらえばいいのに」

涼「利用者目線の意見も必要でしょ。　　沢山お客さん来てほしいし」

萌「でも実際サプリメント類って意識高くない人以外狙うの難しいですよ。　　私も仕

事で関わってなかったら手出さないです  
し」

涼「押田さん、好きな相手振り向かせるとき  
ってどうしてる？」

慌てて後ずさり棚に背中を打ち付ける  
萌。

萌「な、何です急に？」

涼「まず自分に興味を持ってもらおう。その

ためにどうしたら振り向かせられるかの  
リサーチ」

萌「リサーチって街頭インタビューでもする  
んですか？」

涼「一般的なドラッグストアなんかだと無難  
に売れるものしか置いてないじゃない？

でもうちはサプリメント特化店。ここは  
差別化したい」

萌「売れないもの置いても」  
涼「置くのは売れないものじゃなくてここで

しか買えないものだよ。普段興味が無い  
人でも足を運びたくなるような店づくり

「がいいと思うんだ」

萌 「そういう、恋愛が好みなんですか？」

涼 「いや、女の子だしそういう例えのほうが  
伝わるかなって。いい例えじゃなかった  
た？」

萌 「わかる、ようになれるよう頑張ります！」

涼 「オープンまであと一息、頑張ろう！」

萌 「そういうえば転職、どうですか？」

涼 「全然。駄目だね行動の遅い男は」

萌 「そう、なんですか」

涼 「押田さんは順調？」

萌 「今度面接が」

涼 「流石、僕も頑張らないとな。いつまで

も押田さんたちに頼ってばかりいられな  
いし」

萌 「もっと、頼ってください」

涼 「十分頼ってるよ」

萌 「今よりずっと頼られたいんです、必要と

されたいんです！ 堺さんに」

涼 「押田さん？」

萌「好きです、堺さんが！　なんでかわかんないけど」

涼「え、ええ？」

萌「ああ、すいません忘れてください！　いや片隅では覚えてほしいけど恥ずかしすぎて死ぬ！」

目を回す萌の方を掴む涼。

涼「お・ち・つ・い・て！」

慌てて手を離す涼。

涼「……オープンまでは仕事に集中しようか」  
萌「そう、ですね、すみません……」

○ 萌の部屋（夜）

ベッドに突っ伏す萌。

萌「もう仕事いけない……」

Twitterをスクロールしていくと優斗のアカウントで配信が行われている。

萌「え、優斗！」

配信「CR」を慌ててタップ。

優斗「生誕楽しみにしてたみんなごめん。俺



もみんなも思うようにいかないことある  
と思うけどまた必ず会おうな！」

萌、最高額のスパチャを送る。

優斗「みんなスパチャありがとう！　これから  
も見守り合っていていこうな」

配信が終わり、下に十條裕也（18）の  
ツイートが見切れる。

萌「……会いたい、な」

画面の消えたパソコンに寂し気な萌の  
顔が映る。

萌「やつぱり会いたく、ない」

ベッドに倒れ込む萌。

○堺宅・リビング

翔の寝息が聞こえる。

夕飯を食べながらうつらうつらしてい  
る涼。

別所飛鳥（35）からの着信で目を覚ま  
す。

飛鳥「翔の具合は？」

涼「落ち着いたよ。さっきやっと寝たところ」  
飛鳥「親の大変さ身に染みたでしょ？」  
涼「専業主婦って偉大だよ、こんなの無償で自立するまで続けるとか地獄でしかない」  
飛鳥「代わってほしい？」  
涼「自分でやるって決めただ。投げるつもりなんてない」  
飛鳥「月一で預けといてよく言う」  
涼「それは翔が会いたがるから」  
飛鳥「再婚は？新しい母親とか考えないの？」  
涼「子守りのために結婚なんて出来るわけないだろ。そもそも恋愛相手探す余裕ないし」  
飛鳥「私はもう恋愛とかいいわ」  
涼「自由になれたのに？」  
飛鳥「口先だけの貴方に翔を丸投げした自分に失望しただけ。好きとかそういうのよ」  
涼「好きとかそう言った」  
涼「好きってなんだろ？もう生きるの」

が作業になってきたよ」

飛鳥「私たちどこがお互い好きだったのかしら？」

涼「考えないと出ない程度の好き、だったのかも」

飛鳥「何もかも、いつの間にかなくなって。

いい母親になろうとしたのにさ」

涼「より、戻す？」

飛鳥「何言ってるの」

涼「言ってみただけだって。でもせめて翔の前くらいはそれらしく振舞ってくれよ」

飛鳥「私は産んだだけのパートタイムマザー。

時間外労働は勘弁して」

涼「お前なあ……」

涼の服の裾を掴む翔。

翔「パパ」

涼「悪い、煩かったか？」

翔「トイレ」

飛鳥「早く行ってやんなさい、パパ」

苛立たし気に通話を切る。

トイレの前で眠そうに壁にもたれる涼。  
トイレの流れる音。

翔が出てきて涼に抱きつく。

翔「パパ、好き」

涼「パパも大好きだぞ」

× × ×

萌「好きです、堺さんが」

× × ×

涼、頭を抱えしやがみ込む。

翔「パパ？」

涼「どう答えればいいんだろう？」

翔「はい！」

涼「？」

翔「お返事！」

涼「そのくらいきっぱり言えたらなあ。

や、流石にそれは配慮なさすぎるか。好

き、ねえ」

○ 萌の部屋

パソコンで涼と通話する萌。

目を画面からわずかに逸らしている。

萌 「…：…どう、ですかね？」

涼 「い、いいと思う」

恐る恐る画面に視線を向けるとお互いに視線を逸らす。

萌 「あの…：…」

涼 「やつぱ、言わないと駄目だよな」

萌 「うう…：…」

涼 「そもそもなんで僕なの？ 迷惑かけてば

つかだし子供だっている。 今までそんな

親しくした記憶もないし」

萌 「何でも理屈で説明出来たらこんなに悩

まないです」

涼 「好きってなんだろうね？」

萌 「会いたいか、話したいとか？ なんか

噴き出してくるんです」

涼 「そっか」

萌 「で、その…：…」

涼 「気持ちには、ありがとう」

俯き泣きそうな萌。

萌 「どうしたら、好きになってももらえるんで  
すかね？」

涼 「え？」

萌 「結婚まで経験されてる大先輩じゃないで  
すか。私なんかより詳しいかなって」

涼 「生憎失敗談しか持ち合わせてないけど」  
萌 「時々不安になるんです。寂しさで気が

迷ってるのかなって？」

涼 「好きかわからないで迷ってる？」

萌 「好きがわからないんです。色んな好き  
があつて、でも今堺さんにある好きは他の  
どれとも違ってて。それで耐えきれずつ  
い。いつかの後悔より今後悔するほうが  
私にはきつと耐えられないから」

涼 「ごめん、押田さんの気持ちに伝えてあげ  
られない表情を浮かべる涼。」

萌 「好きって、一つしか持ちじゃないん  
でですか？」

涼 「ごめん、押田さんの気持ちに伝えてあげ  
られない。僕には翔もいるし……」

涼「え？」

萌「すいません、断られてるのに諦め悪くて。

あ、話変わりますが約束の食事は行ってほしいです、渡したいものもあるので」

涼「職場じゃ受け取れないもの？」

萌「大きいんで荷物ないときがいいかなって」

涼「……わかった」

通話が切れベッドに仰向けに倒れ込む

萌。

萌「こんな苦しい好き、ヤダな……」

○国筋保育園（夕方）

翔が飛びついてくる。

涼「久々の保育園楽しかったか？」

翔「んーお腹空いた！」

涼「お腹空くくらい遊んだのか。何食べた

い？」

翔「ハンバーグ、唐揚げ、カレー、オムライ

ス……」

涼「食べたいの多すぎだろ」

翔「だって全部好きだもん」

涼「一つにしなさい」

翔「なんで一つだけなの？」

涼「そんな食べれないだろ。欲張ったって」

× × ×

萌「好きって、一つしか持っちゃいけないんですか？」

× × ×

涼「なんで沢山は駄目なんだろうな？」

翔「パパが言ったんじゃない！」

涼「今日ハンバーグカレーにするか」

翔「やったー！」

涼「なあ、翔は好きなものいくつある？」

翔「パパ、ママ、先生、ライダー、あとパソコンのお姉ちゃん！」

涼「お前、勝手に押田さんに電話するなって」

翔「なんで？」

涼「押田さんは一緒に仕事してる人で友達とかじゃないんだ」

翔「仕事の人は仲良くしちやいけないの？」



涼「いけなくはないけど迷惑だから」

翔「お姉ちゃん楽しいって言って言ってくれた。もつとお姉ちゃんとお話したい」

涼「我儘言うなって」

翔「パパが仲良くなればお姉ちゃんともっと

お話しできる？」

涼「それは、今はちよつと……」

翔「仲良くしてよ！　ねー」

涼「参ったな」

ふらつき涼にもたれかかる翔。

翔の額に触り、翔を背負う涼。

涼「早く帰ろう」

翔「仲、良く」

涼「頑張るよ、出来る範囲で」

翔「ハンバーグ、カレー……」

涼「同列か。作っておくから起きたら食べ

ような」

翔「やつ、た」

眠る翔。

涼「仲良く、はありかな？」

○ケンコーフィットネス・オフィス（夕方）

退職願を押し返し合う司と萌。

司「困るよくだでさえ人足りないんだから」

萌「私だって困るんです！ 定時で帰れな

いのは」

司「そんなのみんな通って来て……」

萌「働き方は会社が決めても生き方は自分で

決めます！ お疲れさまでした」

涼、帰っていく萌の元へ。

涼「転職先、決まったの？」

萌「決まりそう、ではあります」

涼「こういうのは決まってから動くのがいい

んじゃない？」

萌「放っておいてください」

涼「でも」

萌「これ以上、優しくしないで」

帰っていく萌の背中を見送る涼。

○萌の部屋（夜）

寝転がりながらスマホで優斗の生配信を眺めている萌。

優斗「早く元気なみんなの顔が見たいよ」

萌「元気なんて、あるわけない」

配信が終わり、メールを確認するも新着はなし。

美紀に電話をしようと画面を開くも手を止める。

萌「オタクでボツチで最悪無職か。頼れるのも親だけとか自立出来ないな」

パソコンの画面に映った自分の顔を見て溜息。

萌「なんであんな態度になるんだろ。嫌われ

たよな……」

○涼の部屋（夜）

ベッドに入った翔の隣で横になる涼。

涼「翔は新しいお母さん、欲しいか？」

翔「お母さん帰って来るの？」

涼「あいつじゃなくて、別の人がお母さんを

するんだ」

翔「お母さんはお母さんだけだよ？」

涼「まあ、そうなんだけど。まだ難しいか」

翔「お母さんいたら楽しい？」

涼「翔は楽しかったか？」

翔「楽しい、パパも一緒ならもっと楽しい！」

涼「……そっか」

翔「パパはママほしい？」

涼「いたら助かる、って思ったら前と変わん

ないよな。　　うちはパパがママもやるぞ！」

翔「僕は？」

涼「大事な家族でいてくれ」

翔の頭を撫でると、涼にしがみついてくる。

○ケンコーフィットネス・オフィス

電話を取りながら青ざめていく司。

司「ふざけるな！」

受話器を叩きつける上司。

司「押田、堺！　出かけるから支度しろ！」

萌 「支度って？」

涼 「何かあったんですか？」

司 「新店のスタッフが感染した。　　ったくオ  
ーブン明日だぞ？」

萌 「まだ搬入終わってないんですよね？　　ど  
うするんですか？」

司 「来れる連中には後から来させる。　　俺た  
ちで作業進めるぞ」

渋々支度をしていると鞆の中に入れっ  
ぱなしのお菓子の袋が目に残まる。

涼 「行こう」

萌 「……」  
涼の少し後ろをついていく萌。

○店舗（夜）

商品の陳列された店内。

司 「搬入完了！　　みんな助かった！」  
萌 「疲れたー」

司 「明日も手の空き次第応援頼む！」  
へたり込む涼にチヨコを差し出す萌。

萌「お疲れ、ですね」

涼「こんな時間まで仕事したの久々だよ」

萌「私はしよっちゅうでした」

涼「本当、いつもありがとう」

萌「もう残業のある仕事はしなないです」

涼「仕事と私生活の両立って難しいよね。バ

ランスよくこなせる人なんてほとんどいないんじゃないかな」

萌「子供っていたらそんな大変ですか？」

涼「うちの身体弱いから風当りきついんだ。

今なんて少し具合悪いつてだけで預けることも出来ないしたまに保育園行かせても遊んだ話も聞かないから友達も出来てない。だからなるべく傍にいてやりたくて」

萌「それって翔君が望んだことですか？」

涼「直接聞いたわけじゃないけど」

萌「いい父親像に縛られ過ぎてないですか？」

涼「子供にとってのいい親になろうとするのは当たり前じゃない？」

萌 「自分を犠牲にしてまで大切にされて素直に喜べますか？」

涼 「犠牲になんて」

萌 「自分のやりたいこと、食べたいもの、したいこと全部我慢して。そんなのつままないじゃないですか」

涼 「親になるってのはそういうことで……」

萌 「子供優先なだけで自分を捨てちゃ駄目じゃないですか？ 共有できるものはしたらいいい」

涼 「そんな簡単じゃ、ないんだよ」

萌 「子供を言い訳に使わないでください！」

涼 「独身の君に何がわかる！」

涼 「涼に背を向ける萌。」

涼 「ごめん、言い過ぎ……」

萌 「……明日、頑張りましょう」

去っていく萌。

涼 「本気で心配してくれてんだよな」

チヨコを剥き食べる。

涼 「これ、こんな美味かったっけ」

○ 萌の部屋（夜）

優斗の誕生日配信をスマホでつけたままベッドに突っ伏す萌。

萌「やっちゃったな……」

優斗の声「みんないっぱいお祝いしてくれてありがとう。ここで今日は大事な発表があります」

顔を上げる萌。

優斗「活動休止中のグループだけど復帰のめどが立たないため解散となります」

萌「そんな……」

優斗「観てくれてるみんなはきっと信じて待っていてくれたと思うんだけどなかなか難しくて。直接会える機会減っちゃうけど俺はいなくならないからこれからも応援してほしい」

安堵の表情を浮かべ仰向けになりスマホを掲げる。

優斗「あと個人的なもの一つ」



画面外から左手を引っ張る優斗。

薬指には指輪がはまっている。

一斉に困惑のコメントが溢れかえる。

自身の左手も映す優斗。

優斗「アイドルでなくなるのを機に結婚しま

した。これからはみんなのためだけじゃ

なく大事な家族のためにも頑張るので引

き続き応援：：」

スマホを顔に落とし微動だにしない萌。

萌「：：は？」

○堺宅前（夜）

車から翔を下し、窓から薬の袋を背負

うに押し付けエンジンをかける飛鳥。

翔の額に冷えピタ。

涼「悪いんだけど明日も：：」

飛鳥「すぐ人をあてにして何も変わってない

じゃない」

涼「外せない仕事なんだ、頼むよ」

飛鳥「その言い訳、久しぶりね」

涼「それは」

飛鳥「家族より仕事が好きなところやっぱり変わってないわね」

去っていく飛鳥。

薬を上着のポケットに入れる。

涼「参ったな」

翔「お留守番、出来るよ」

涼「夜まで一人だぞ？」

翔「頑張る」

涼「なるべく早く帰ってくるからな。

何か

あつたらいつでも電話しろよ」

翔「うん」

○シヨツピングモール・店舗

見るからに浮かない顔の萌。

涼「緊張してる？」

萌「そういうんじゃないんで」

涼「調子悪かったら無理しないで」

萌「身体じゃないんで」

涼「……ごめん」

10時になり、BGMがかかり始める。  
シャツターを開けると既に待機して  
いる客の足が見える。  
思い切り溜息をつく萌。

涼「お客さんの前では……」

萌「わかってます」

シャツターが上がり、客が店に踏み込  
む。  
口角だけ無理にあげたぎこちない笑顔  
を向ける萌。

萌「いらっしやいませ」

○ 堺宅・寝室

目を覚ました翔。  
顔色が悪く具合が悪そうぎこちなく  
身体を起こす。

○ 同・リビング

壁にもたれかかりながら食器棚の引き  
出しを探る。

翔「お薬：」

○シヨツピングモール・店舗

次々来る客の会計をしていく萌。

紙コップを来店する客一人一人に渡していく涼。

涼「新作フレイバーです、どうぞ！」

笑顔を浮かべ走り回る涼に見惚れる萌。

客「あの：」

萌「失礼しました。いらっしやいませ」

× × ×

時計が午後〇時を指す。

客がいなくなり、ぐったりした萌とこ  
ろに紙コップを渡しに来る涼。

涼「あと少ししたら応援来るから頑張ろう！」

萌「なんでそんな楽しそうなんですか？」

涼「お客様の反応直接見れることって少ないしつい」

萌「私はさっさと帰りたいです。他人と関  
わるのも苦手だし健康とかも興味ないし」

涼「僕はこの仕事好きだな。健康じゃなき  
や人ってなかなか笑えないし」

萌「翔君は」

涼「元気なときは楽しそうにやってるよ。折

角こういうところで働いてるからあいつが  
もっと笑っていられるようなもの作れた  
らしいんだけどね」

萌「でも堺さんが余裕なくすのは……」

涼「ありがとう」

萌「何です急に？」

涼「昨日も本気で心配してくれて。心配す  
るのは馴れてるけどされるのなんて馴れ  
ないし。他人ばっかあてにして全然余裕  
ないな」

萌「余裕なんてみんなないです。好きなも  
ののために必死なのはみんな一緒だと思  
うんです。そういうのなかったら私なん  
てただの怠け者ですよ」

涼「俺も翔がいなかったら仕事しかしてない  
な？」

萌「翔君以外にも好きなもの、あるじゃないですか」

涼「久々に仕事に打ち込んでみて思い出した。押田さんのおかげだな」

萌「私は何も」

涼「僕さ、もう少しここで頑張ってみようと思う。沢山迷惑かけるだろうけど好きだし頑張るよ」

萌「応援してます」

店の外の様子を伺い上着のポケットからお菓子を取ってくる涼。

涼「今のうちに少し入れておこう」

萌「いつもお菓子持ってますよね」

涼「翔の、ってあいつ生まれる前から持ってたわ」

萌「甘いものも好きじゃないですか」

涼「押田さんといると色々気づかされ：：」  
反対側のポケットを漁ると翔の薬袋が

出て来る。

涼「なんでここに？」

スマホを取り出すと自宅から着信履歴が残っている。

涼「翔の薬置いてくるの忘れた」

萌「大丈夫なんですか？」

涼「寝てれば大丈夫だと思うけど」

自宅に電話する涼。

涼「翔、ごめん！薬パパが……」

翔の声「パ、パ。苦しい……」

涼「翔？おい、どうした？」

萌「翔君どうかしたんですか？私店番して

るんで行ってください。今落ち着いてる

し」

涼「そんなことさせられないよ。休憩も行

けてないうえに応援だっていつ来るかか

わからないし」

萌「大丈夫です、堺さんの分も働くの馴れて

るんで」

涼「押田さんだって自分のこと考えてないじ

やないか」

萌「え、私？」

涼「僕を助けてくれるのは凄く助かる。感謝してもしきれない。だからって自分を犠牲にするのは違うと思う」

萌「そんなつもりは」

涼「僕は翔のせいにしない、押田さんは僕のせいにしない。そこから始めない？」

萌「はじめ……って、え？」

涼「僕も押田さんみたいに好きなものたちと真っ直ぐ向き合えるようになる。翔は待たせることになるけど応援来るまで二人で頑張ろう！」

萌「はい！」

○堺宅・寝室（夜）

薬袋をベッドの傍らに置き眠る翔。

○ショッピングモール・店舗（夜）

シャツターが下りる。

司「営業初日お疲れ様！」

萌「終わった〜」



涼「皆さん今日もご迷惑をかけしてすいませ  
ん」

司「迷惑かけた分は仕事できっちり返して  
くれよ？ さ、撤収撤収！」

足早に帰っていく司。

涼「押田さん食べもの何が好き？」

萌「翔君って何が好きですか？」

涼「あいつはハンバーグ、オムライス、唐揚

げ……」

萌「それ全部あるとこ行きませんか？」

涼「押田さんのお祝いなのに？」

萌「翔君も一人で頑張ったんですよ？ ご褒

美」

涼「甘やかすなあ」

萌「いつも好きなもの食べさせてくれるって

言っていましたよ？」

涼「僕もだったか」

笑い合う二人。

並んで歩くと手が少し触れあう。

○ファミレス

涼が翔と手を繋ぎ来店し店を見渡すと、  
萌が大きな袋を傍らに手を振る。  
コップが空になっている。

涼「待たせてごめん」

萌「全然！ 翔君お腹空いた？」

翔「空いた！」

涼「こら、ご挨拶」

翔「堺翔です！」

萌「押田萌です！」

二人に視線を向けられる涼。

涼「堺、涼です」

萌「じゃ早速どうぞ！」

傍らの袋を涼に渡す。

覗き込むと目を大きく見開く涼。

萌「好き、なものでした？」

涼「いいいの？」

翔「僕も見たい！」

萌に視線を送ると頷かれ袋からプラモ  
デルの箱を取り出す。

萌「前見てたんで好きなのかなって」

涼「翔産まれてから作る余裕なくてさ。大

事にするよ」

翔「僕も作りたい」

涼「翔には早い」

翔「ズルい！」

萌「代わりにお姉ちゃんが遊んであげよう

か？」

涼「いいいの？」

萌「持つてるだけじゃ宝の持ち腐れです」

翔「遊ぶ！」

涼「ちなみに結構かかるよ」

萌「大丈夫ですって数時間くらい」

涼「いや、50時間は……」

萌「ご、じゅう……」

翔「お姉ちゃん大富豪やろう！あとウノと

将棋と……」

涼「そうだ注文、押田さん何食べたい？」

萌「ハンバーグで」

翔「僕スパゲティと唐揚げとたこ焼きと……」

涼「一個！」

萌「今日は私もいますし全部いっちゃんいましてよう！」

翔「じゃ、スパゲティと唐揚げとたこ焼き！」

涼「食べれるかな」

萌「堺さんは？」

涼「オムライス」

翔「僕も！」

涼「欲張りだな」

萌「シエアしましょう！みんなの好きを」

○ 萌の部屋（夜）

寝転がりながらマッサージガンを二つ駆使しマッサージする萌。

萌「いいわこれ」

スマホで「Mittler」をスクロールさせていくと裕也の生配信「コア」を押してしまふ。

裕也「やつほー、みんな待った？」

萌「お？」

裕也「えーっと、今日もみんなお疲れ様！ 仕事とか学校とか大変だったよね」

挨拶以外ない反応のないコメント欄。  
萌「初々しいな」

最低額のスパチャを送る萌。  
コメント欄を凝し満面の笑みを浮かべる裕也。

裕也「萌さん、萌！ 始めましてなのにありがとう！」

萌「可愛いこの子！」

涼から「今度は押田さんの本当に好きなもの食べに行こう」とライン。

萌「本当に？」

涼「今度は翔抜きで」

ベッドから勢いよく跳ね上がる萌。

萌「二人きりって、それはつまり……」

裕也「それじゃ今夜はこの辺で、アデュー！」

スマホを抱きしめベッドで嬉しそうに  
転がり回る萌。

了